中世英詩における春の概念[1]

佐々部英男

一

四季という語は、ふつう一年を等分した春夏秋冬を意味する。しかし本来、春秋は夏冬、即ち暑い季節と寒い季節、あるいは日の長い季節と短い季節とのあいだの過渡的季節[2]である。英国のような北国では、春秋の過渡的性格が濃くなり、春秋を夏冬と区別する季節的特徴が薄れてくる。日本語では春秋に富むなどというが、英語では年齢をあらわすのに winter を使うのが OE 以来の伝統的表現[3]である。暦の上、記号の上では、英語の四季は日本語の四季に対応するとしても、意味内容はかなり違う。本来南欧起源の暦と実際の季節感とのずれも、英語のばあいかなり著しいと思われる。[4]

先に OE 詩における四季をしらべた際に、[5]最も曖昧なのは春の概念であった。本稿ではOE詩にME詩の一部も加えて、春のばあいを改めて検討してみたい。

二

ボエティウスは「哲学の慰め」のなかで、神の意志によって宇宙の秩序が保たれ、天体の運行もなだらかに行われると述べたあとで、四季についてふれている。

Isdem causis vere tepenti
Spirat florifer annus odores,
Aestas Cererem fervida siccat,
Remeat pomis gravis autumnus,
Hiemem defluus inrigat imber. (Bk. 4. M. 6.)

同じ原因によって温かい春には
花咲ける年が香りをはなち
暑い夏は穀物を乾かし
秋は果実をになって立ち帰り
降りそそぐ雨は冬を浸す。

この一節をOE詩訳[6]およびチョーサァ訳と比較してみると、四季の名称の上で、顕著な相違が見られる。

Latin	OE version	Chaucer version	Mod E
ver	lenctentid	first somer	spring
aestas	sumer	hot somer	summer
autumnus	hærfest	autumpne	autumn
hiems	winter	wynter	winter

英語で始めてautumnを使ったのはチョーサァとされているが、これには限定が必要であろう。チョーサァはボエティウスの訳以外ではこの語を使っていない。しかも一箇所ではautumpne (that is to seie,... the laste ende of somer)[7]とわざわざ断っている。OE詩以来のharvest (cf. G. Herbst) も彼の作品には全く見られないとすると、結局チョーサァにとって、秋は「夏の末」ほどの意味しかもたなかったといえる。

しかし、更に注目されるのが春の場合で、チョーサァは春という語のかわりに夏を使いわけている。これに対し、OEの訳者は、アルフレッドともいわれているが、一応原文に対応する語をあてはめ、春をlenctentidと訳している。この事実をどううけとるべきであろうか。

三

筆者の経験では、秋から春にかけての英国で、特に意識にのぼるのは日差しとともに日没ではないかと思う。十一月から十二月にかけて日が短くなってゆく心細さ、反対に年が明けて日脚が少しづつ延びてゆく嬉しさは、京都の場合よりも著しい。OEにおいて春を意味したlenctentid或はlencten, lengtenの語原はlong, lengthと関れんし、「日が長くなってゆく季節[8]」とされているが、筆者には納得のゆく解釈である。この語は *The Anglo-*

Saxon Chronicle[9]にも用いられ、Bosworth の辞書にもかなり例があって、OE後期の散文では比較的普通の語であったと思われる。

しかしOE詩に限ってみれば僅かに九回で、他の季節語と比較すると、hærfest（七回）は別として、winter（百廿回）sumor（廿七回）には見劣りがする。更に、内容について検討すれば、lencten, lenctentid の使われているのは次の詩に限られる。（括弧内の数字は頻度を示す）

Meters of Boethius (1), *Menologium* (1), *Elene* (1), *Paris Psalter* (1), *Maxims II* (1), *Phoenix* (1), *Seasons for Fasting* (3)

Meters of Boethius は既に引用した箇所。チョーサァの逐語訳にたいし自由訳で、春を四季の最後にまわし、「春には木の芽が吹く」といっているにすぎない。次の *Menologium*[10] は韻文の聖人祭日暦で、lenctenは二月七日から五月九日までとしている。この詩では夏秋冬については、多少とも季節の描写があるのに、春については全くないことに注意すべきである。*Elene* も Invention of the Cross（ヘレナの聖十架発見）が五月三日であることを示すのに、「春の立ち去る六日前」としてひきあいにだしたにとどまり、*Paris Psalter* も「汝、神が夏と春をつくられた」の一行に終る。*Maxims II*, *The Phoenix* の例は既に前述の拙稿で紹介した。ただ、*Maxims II* の四季にかんする五行の中で、「一番寒いのは冬だが、寒さが一番長く続くのは春だ」という一行に、作者は最も苦心したと思われる。*The Phoenix* の例がもっとも春の描写らしいものであるが、この詩では不死鳥の住む極楽では冬の様々な恐怖がないことを列挙したくだりの方がずっと印象的である。

最後の *The Seasons for Fasting* では、三回使われているが、「断食の季節」という題名からも察せられるよ

うに、この詩では Lent（四旬節）[11] の意味になっている。

Eac we feowertig daga　　fæsten healden
ær þæm æriste　　ures dryhtnes,
þæt nu lengtentid　　leoda nemnaþ. 103–5.

また我々は　主の復活に先立ち
人々が今や　四旬節と名づける
四十日の断食を　守らん。

以上が OE 詩にあらわれる lencten のすべてで、内容においても winter とは比較にならぬほど貧弱であり、しかも *Maxims II* をのぞくと、いわゆる Christian poetry に見られることに注意したい。*The Seafarer* [12] や *Beowulf* [13] には冬が去って春の到来を描いた数行があるにしても、決して lencten とはいっていない。

したがって、ボエティウスの訳で lenctentid が使われているという事実は、lencten がOE 詩の伝統に深く根ざしていた証拠にはならないであろう。

更にゲルマン諸語の中で、英語だけが[14] lencten に四旬節というキリスト教的意味を与えたといわれるが、丁度春の女神 Eastru をたたえる春の祭が Easter [15] になったのを連想させる。「日が長くなってゆく季節」というのが lencten の語原だとすれば、春という意味は極めて漠然としている。これにくらべると、四旬節という意味は明確な内容をもっている。現在まで、この意味では、lencten が Lent として続いてきたのも偶然ではないであろう。

四

ME詩で lenten を春の意味に使った詩としては、*MS. Harley 2253* の春の歌を第一に挙げなければならない。

Lenten ys come wiþ love to toune,
Wiþ blosmen and wiþ briddes roune. 1-2.

春は里へやってきた
恋と花と鳥の声（厨川訳）[16]

この lenten には三つの点に注目したい。即ち lenten=spring の意味では *NED* が挙げている最後の例であること。次にこの詩で「春は里へやってきた」というのは、あとにナィティンゲール[17]があらわれることからも、OE 詩 *Menologium* の「二月七日に春は里へやってきた」とは、lenten の内容がちがうことである。更にこの表現が *The Thrush and the Nightingale* では、*MS. Digby 86.* のように、

Somer is comen wiþ loue to toune,
Wiþ blostme, and wiþ brides roune.

として、lenten が somer に置きかえられている写本と、*Auchinlech MS.* のように lenten のままの写本があることである。

五月[18]という月は暦の上では春と夏にまたがっている。lenten のもう一つの意味である四旬節は、年によってかなりの変動があるにしても、復活祭の前日までであるから、五月にまでは達しない。lenten が五月については用いられなくなったのも当然であろう。

'Lenten ys come' は一三世紀末か一四世紀始の作と考えられているが、*Sir Gawain and the Green Knight* では、lenten が明らかに四旬節の意味で、しかも somer と一緒に使われている。それは Gawain が緑の騎士との約束をかわしてから旅立つまでの、慌しい一年の経過を描いたくだりである。チョーサァのプロローグ冒頭とともにME詩における四季の描写の代表的なものである。

After Crystenmasse com þe crabbed lentoun,
Þat frayste3 flesch wyth þe fysche and fode more symple;
Bot þenne þe weder of þe worlde wyth wynter hit þrepe3,
Colde clenge3 adoun, cloude3 vplyften, 505
Schyre schede3 þe rayn in schowre3 ful warme,
Falle3 upon fayre flat, flowre3 þere schewen,
Bo þe grounde3 and þe greue3 grene ar her wede3,
Brydde3 busken to bylde, and bremlych syngen
For solace of þe softe somer þat sues þerafter 510
bi bonk;

And blossumeȝ bolne to blowe
Bi raweȝ rych and ronk,
Þen noteȝ noble innoȝe
Ar herde in wod so wlonk.

After þe sesoun of somer wyth þe softe wyndeȝ,
Quen Ȝeferus syfleȝ hymself on sedeȝ and erbeȝ;
Wela wynne is þe wort þat waxes þeroute,
When þe donkande dewe dropeȝ of þe leueȝ,
To bide a blysful blusch of þe bryȝt sunne;
Bot þen hyȝes heruest, and hardenes hym sone,
Warneȝ hym for þe wynter to wax ful rype;
He dryues wyth droȝt þe dust for to ryse,
Fro þe face of þe folde to flyȝe ful hyȝe;
Wroþe wynde of þe welkyn wrasteleȝ with þe sunne,
Þe leueȝ lancen fro þe lynde and lyȝten on þe grounde,
And al grayes þe gres þat grene watȝ ere;
Þenne al rypeȝ and roteȝ that ros vpon fyrst,

And þus ȝirneȝ þe ȝere in ȝisterdayeȝ mony,
And wynter wyndeȝ aȝayn, as þe worlde askeȝ,
no fage,
Til Meȝelmas mone
Watȝ cumen wyth wynter wage;
Þen þenkkeȝ Gawan ful sone
Of his anious uyage.

〔大意〕[19] クリスマスのあとには、佗しい四旬節が訪れ、精進料理で肉体を苦しめる。そのとき天候は冬と争い、寒さは消えて雲は晴れあがる。暖い雨が芝[20]生をぬらし、花がほころび、野も木立も緑の装いをつける。小鳥は巣を造るのに忙しく、春の到来をたのしみに声高くさえずる。生垣には花が咲きほこり、森には妙なる調べがひびきわたる。

西風が息吹く季節のあとには、すくすくと草木が生い繁り、木の葉から滴る露は輝く太陽を待つ。そのとき秋が慌しく訪れ、草木[21]を促し、冬に備えて熟するようにと警める。秋の乾きは砂塵を大地からかりたて、木枯しは太陽とたたかう。木の葉は地に舞[22]い降り、かつては緑の草も色あせ、始めに崩えいでしよろずの植物も熟して朽ちはてる。かくて一年は多くの過ぎし日となる。まこと冬がまいもどり、収獲の満月が冬の前ぶれ[23]とともにやってくる。そのときガウェインは苦難の旅路を思う。

最初の行の lentoun は明らかに四旬節を意味するが、同時に四旬節頃の時候を示しているのは興味深い。即ち次の二行で、冬との戦のあとに、冬が去ってゆく。寒さも遠のき、どんよりした空も明るくなってゆく。以下も伝統的な表現[24]で春の到来を描く。注意したいのは五一〇行の þe softe somer þat sues þerafter（あとに続くおだ

やかな夏）で、sues (follows) という語をみても、ここで時間的に一くぎりあって、五〇九行までは冬の終から四月末までの描写、五一〇行から一七行を五月の描写とみたい。花といっても、五〇七行の flowreȝ þere schewen は、春のはじめのクローカスあたりを連想させ、五一二—三行[25]では、生垣に咲き乱れた花ととるのは行き過ぎであろうか。

五一六行の after を副詞として、即ち afterwards ととる説[26]もあるが、N. Davis 教授にしたがって前置詞にとった。その場合、after は五一七行の終までかかり、五一〇行の þe softe somer は五一六行の þe sesoun of somer wyth þe softe wyndeȝ と同じで、夏といっても前半の五月を意味する (þe softe somer = May については後述する)。五一六行の after を前置詞にとれば、五一六、七行と五一八行以下との間には、時間的区切がある筈で、五一八—二〇行は、夏の後半[27]、即ち植物は生い繁り、輝く日差しの六、七月の描写とみたい。と思う間もなく秋が訪れ、五三二行のミカエルマス（九月廿九日）の満月はもう冬の前ぶれである。慌しい四季の移り変りは、Bot þenne (but then) 五〇四、五二一行といった何げない表現にも窺われるように思う。

Sir Gawain には春について、もう一つ見逃せぬくだりがある。即ちガウェインが城の寝室に案内され、もってこられた服に着更える場面である。

Sone as he on hent, and happed þerinne,
Þat sete on hym semly wyth saylande skyrteȝ,
Þe ver by his uisage verayly hit semed
Welneȝ to vche haþel; alle on hwes

Lowande and lufly alle his lymmeȝ vnder,
Þat a comloker knyȝt neuer Kryst made
hem þoȝt. 864–70.

朝顔形[28]の裾をした彼に似合の一着を
とってまとえばその様は
まこと春が訪れたかと並みいる人には
思われた。[29] あでやかな色をつけて
彼の四肢はうるわしく輝き
これ以上の美丈夫をキリスト様が
つくられたとは思われなかった。

問題は二行目の ver である。*NED* はこの箇所を一項目にしているが、結局 Obs. (meaning obscure) として、何の定義も下していない。毛皮[30]という説もあり、それに従った訳[31]もある。しかし、今日では ver=spring と解するのが普通[32]であり、僅かではあるが、チョーサァ[33]その他[34]の例もある。英語に入った時代はかなり後であるが、形容詞 vernal[35] は今日でも立派な英語である。

五

しかし ver は頻度の点からも、MEで広く用いられた語とは思われない。形容詞 vernal が今日まで用いられてきたにせよ、名詞 ver は語形として、殊に母音大推移を経た場合、あまりに貧弱な気がする。[36] また今日の

spring も一五世紀末まではあらわれない。他方 lenten も四旬節という意味に専ら用いられるようになったとすると、一四世紀の詩人たちは春を歌いあげるのに、如何なる表現によったであろうか。

既に述べたごとく、summer の意味を拡張する方法[19]が考えられる。その場合、soft という頭韻語との結びつきに注目したい。

For solace of þe softe somer þat sues þerafter.
Sir Gawain and the Green Knight, 510.

After þe sesoun of somer wyth þe soft wyndeȝ.
ibid. 516.

In a somer sesoun, whanne softe was the sonne.
Piers the Plowman, Prologue 1.

And the sesone of somere when softe bene the wedres.
The Parlement of the Thre Ages, 2.

Now welcome, somer, with thy sonne softe.
The Parlement of Foulys, 680, 685, 690.

最初の二例については既に述べた。次の二例では前か後に May という語があり、最後のチューサーの例について、R. T. Davies は 'probably including our spring'[20] と註している。日本語の場合せいぜい初夏どまりで、ただ夏と訳すのは misleading であろう。

鳥といえば *Cuckoo Song* の

Sumer is icumen in.

を思いだすが、これまた R. T. Davies は‘Spring has come in’[39]と訳している。結局、英国人にとっても ME における summer の使い方は、今日と違うことになる。

チョーサァの場合、強いて春と夏を区別しなければならぬ時は、ボエティウスの訳のごとく、first somer と hot somer としたが、不自然の感をまぬがれない。チョーサァには summer の例が四十程あるが、大半は修飾語を伴わずに用いられている。そうなるとチョーサァの summer は、spring, summer 更に autumn まで含む概念、即ち winter に対立する概念となる。これは OE から遡った印欧語本来の winter と non-winter の二季区分につながり、winter and summer (i.e. all the year round) という表現として今日まで続いている。しかし明確な季節の表現としては不十分といわざるをえない。

チョーサァは summer よりも May[40]を好み、他の月名とは比較にならぬほどよく使っている。勿論、‘fresh month of May’が ME 詩の伝統的表現であったには違いないが、その背後には、五月自体の爽やかさ、更に当時の英語に spring といった表現がなかったことも、考えてよいのではないか。

〔註〕

① 本稿は昭和四十年十月十七日、京都大学文学部における中世英文学研究会第二回例会で朗読した原稿に加筆したものである。

㉒ *Encyclopaedia Britannica* (1963版), seasons の項には、

'if the husbandman's yearly round had not left so profound an impress on European speech, spring and autumn would be considered merely transitional periods, hardly worthy of names co-ordinate in rank with those of summer and winter.' とある。

㉓ もっとも summer も、若い女性の場合などに用いられるが、*NED* では一四世紀からとしている。

㉔ The English winter — ending in July,

To recommence in August. *Don Juan*, Canto XIII. xlii.

というバイロンの言葉を御興教授から教えられた。

㉕ 英文学評論第十五集「古代英詩における四季の概念」

㉖ *The Anglo-Saxon Poetic Records*, vol. V, *The Meters of Boethius*, p. 201.

㉗ *Boece*, BK. I. Metrum 5.

㉘ *NED* Lenten の項、Wyld, *UED* の Lent の項も同様。

㉙ *The Laud MS* では 798, 1002, 1009 年の項など。

㉚ 前出の拙稿三一七頁参照。

㉛ K. Sisam, *Studies in the History of Old English Literature*, p. 55 にこの詩の要約があるが、Sisam は三箇所とも Lent, Lenten としている。

㉜ *The Seafarer*, 48–9.

㉝ *Beowulf*, 1133–6. 原文の 'oþer gear' を J. C. Hall は 'another year' とせずに 'a new spring' と訳している。

㉞ *NED*, Lenten の項。'The ecclesiastical sense of the word is peculiar to Eng., in the other Teut. langs. the only sense is 'Spring'.'

⑮ C. L. Wrenn: *The English Language* (Kenkyusha edition), p. 34.

⑯ 厨川文夫「中世の英文学と英語」pp. 147–9. にはこの詩の原文および全訳がのっている。

⑰ *Encyclopaedia Britannica*, Nightingale の項。'Poets and novelists are apt to command at will the song of this bird, irrespective of season. If the appearance of truth is to be regarded, however, it is dangerous to introduce a nightingale as singing in England before April 15 or after June 15.'

Wrenn 教授は、*The Owl and the Nightingale* の作者を'a good ornithologist'であると筆者に云われた。

⑱ OE の *Menologium* では五月九日が夏の到来である。

⑲ このような技巧をこらした頭韻詩を逐語訳するには、筆者の語彙が不足するので、大意にとどめる。以下の(註)では、Tolkien & Gordon および Gollancz の解釈のほかに、両者を比較し自説を加えた Norman Davis 教授の一九六〇年度、オックスフォード大学におけるこの詩の解釈を紹介することにした。

⑳ *Pearl*, 57 に I felle upon þat flowry flaȝt (i. e. glassy plot) とあり、flat は flaȝt の a corruption or scribal shortening であろう。Gollancz (glossary) の plain は不可。—Davis.

㉑ Tolkien & Gordon は 521 hym を reflexive にとり、(glossary) hardenes him を'become severe'としているが hym は 518 þe wort をうけるとする Gollancz が正しい—Davis.

㉒ 526 で Gollancz の laucen <ON. lauss (loose) は ME で自動詞の例が全くないようなので、Tolkien and Gordon lancen (fly) がより適当である—Davis.

㉓ 533 wage は Gollancz (glossary) の challenge よりも Tolkien & Gordon (glossary) の pledge, earnest がよい。—Davis.

㉔ この自然描写の独創性よりも伝統性を強調した論文として、*MLR* (1955) に D. A. Pearsall, Rhetorical 'Descriptio' in *Sir Gawain and the Green Knight* がある。—Davis.

㉕ 511～15の‘wheel’の部分は‘typical May scene’である—Davis.

㉖ Tolkien & Gordon のテキストでは、after のあとにコンマがあり、Gollancz は註で‘Afterwards (comes) the season of summer’. と訳している。しかしいづれの punctuation も unsatisfactory で、この after を副詞ととるのは strange である—Davis.

㉗ later summer—Davis.

520 sunne のあとは Tolkien & Gordon, Gollancz ともピリオッドになっているが、503と同様セミコロンにした。

㉘ 863 saylande は Tolkien & Gordon および Gollancz の‘flowing’よりも‘widely-flaring’とした方が more likely である—Davis.

㉙ Tolkien & Gorden のテキストでは 867 haþel の次のセミコロンはなく、hwes のあとにコンマがある。

㉚ Gollancz は Menner (*MLR* xix. 205–6) の‘the fur-trimming (i. e. a collar of fur) by his face’という説を紹介しているが、自らは Spring 説をとり、Chaucer の the Squire の描写

Embrouded was he, as it were a mede
Al ful of fresshe floures, whyte and rede.

と比較している。

㉛ Loomis and Willard, *Medieval English Verse and Prose in Modernized Versrions* (1948) の Theodore Haward Banks, Jr. の逐語釈。

㉜ ver は‘well-established at this date’.—Davis.

㉝ *Troilus and Criseyde*, BK. I, 157. チョーサァはこの一例だけである。

㉞ *NED* ver および vere の項参照。

㉟ *NED* では 1534 More の例を最初に挙げている。

㊱ フランス語でも ver は一六世紀までとされ、イタリア語でも vere は obsolete で、primavera となったのと比較される。

㊲ ちなみに Robinson の Glossary では Somer : summer ; the warm season (sometimes including spring) Skeat の Glorsary では somer-sesoun : spring, early summer とある。研究社「英語語原小辞典」spring の項参照。

㊳ R. T. Davies, *Medieval English Lyrics*, p. 132.

㊴ op. cit. p. 52.

㊵ コンコーダンスによってチョーサァにおける月名の頻度をラテン形も含めてしらべてみた。

Jan.	Feb.	Mar.	Apr.	May.	Jun.	Jul.	Aug.	Sep.	Oct.	Nov.	Dec.
41	3	11	11	80	3	17	6	2	2	2	6

January が多いのは、*The Merchant's Tale* で May という若い女房と結婚した老人の名前として使われていることによる。チョーサァの場合、一年は春分から始まるとされていたので、日本語の正月のような改まった感じはなかったと思われる。May と January を組合せたところに、チョーサァの意図を読みとることができる。